

## 優秀賞

### 僕のポジション

鶴城中学校三年 井上力輝

僕は小学校の頃、ソフトボールのクラブチームに入っていました。その流れで中学校は野球部に入りました。最初は同級生は十人で、レギュラーもすぐとれると思っていました。そこから一人抜け九人になってしまいました。このメンバーで最高学年になったと

き、大会へ出るんだと思って疑いませんでした。

三年生が引退し、一、二年生の新チームになりました。そこで僕は現実の厳しさを目の当たりにしました。新チームになったときレギュラーをとった同級生もいたし、試合に出られない先輩達も数多くいました。僕はそのとき

「あ、これは学年ではなく、本当にうまい人が選ばれるサバイバルなんだ。」

と気づきました。そこから同級生は次々に野球のクラブチームに入っていきました。僕も誘われましたが、入りませんでした。みんながどんどんうまくなって、自分だけ置いて行かれるかもしれない。と、焦りと不安がありました。しかし同級生とポジションがかぶったとき、バッティングがうまくいかなかったとき、

「やっぱりクラブチームに入ったほうがいいのかな。」と、常に心の中のものややは晴れませんでした。でも、野球部の先輩もいろいろやさしく教えてくれて、僕はスコアラーという大事な役割をもらいました。それは僕に与えられた大切なポジションでした。僕は悩みながらも自分のできることをやっていこうと思えました。二年生になり、夏の大会が来て、先輩達は惜しくも

負けてしまいました。一回も試合に出られなかった先輩もいました。みんな泣いていました。そんな悔しそうな姿を見て

「次は僕が最高学年になるんだ。みんなでもっと上に行きたい。」

と強く思いました。

新チームになり、僕達が引っ張っていく存在になりました。でも僕の決意とは裏腹に、現実是一年生がエースとなり、スタメンは一年生が半分うめてしまいました。そのときはショックと悔しさで頭がいっぱいでした。それでも僕は腐りませんでした。僕がかつて先輩にしてもらったように、後輩へいろいろなことを教えていきました。

その中には僕の大事な役割であるスコアラーを託すという任務もありました。スコアラーは試合中、先生の隣に座り、常に集中し、試合に出ているメンバーと同じ気持ちで戦っている、僕はそんな想いでいつもスコアを書いていました。後輩へもその想いが伝わってほしいと思いました。

あつという間に三年生になり、夏の大会へ向かっていきました。結局僕はここまでずっとレギュラーは取

れず、スコアラーとして最後を迎えようとしていました。僕はスコアラーという役割は好きだけど、やっぱり試合には出たいし、出られずに終わるのは嫌だと思いながら、最後の大会を迎えました。

市大会は僕がずっとスコアを書いていました。そして市大会は優勝し、西三大会への出場を決めました。西三大会の初戦、厳しい戦いで、みんなベンチから飛び出さんばかりの勢いで応援していました。それを見て僕も

「最後の試合になるかもしれない。みんなと一緒に応援したい。」

と思いい、スコアを後輩に託しました。そこから流れが変わり大逆転。初戦は突破しました。

二試合目は僕は代打で出ることを予告され、スコアは他の人に託す

「やっと出番がきた、最初で最後のチャンスかもしれない。」

と、不安と興奮の中、出番を待ちました。そしてそのときが来ました。僕はベンチの仲間に

「見てろ」

と大きく意気込みました。でも実際、打席に立つと、

緊張で爆発しそうでした。そんな中、先生と後輩が

「打て打て、変化球あるぞ。」

と笑顔で応援してくれました。僕は

「絶対打つぞ。打ってやる。」

と全力でフルスイングしました。

結果は、全力の三振でした。これが僕の集大成となりました。悔しかったけれど、全力でやりきったので悔いはありません。

そして僕達三年生の夏は終わりました。

僕は最後までレギュラーは取れず、活躍もできなかったけど、このメンバーで楽しく野球ができたこと、スコアラーとしてできることをやってきたことを誇りに思っています。

野球のポジションは九つ。しかし、みんなそれぞれ自分のやれることがあり、それが自分のポジションだと思えます。

そして僕は今、自信をもって言えます。

僕のポジションは、全力フルスイングのスコアラーです。